

【北海道新聞に掲載されました】

8月28日(火)から9月3日(月)の期間、本校から韓国・素明女子高等学校へ交換留学を行っており、本校からは生徒8名、教職員3名が参加しています。すべての国際交流プログラムを無事に終えた訪問団は、9月3日(月)に韓国を出国し、夕方に羽幌町に到着する予定です。

第3版(地域)掲載

北海道新聞

2018年(平成30年)9月3日(月曜日)

地域の話

羽幌高と韓国・素明女子高の交流20年の主な歩み

1999年 11月	素明からの最初の訪問団(10人)、羽幌高の授業に参加
2000年 9月	羽幌から初めて訪問(11人)、授業参加や福祉施設見学
02年 9月	羽幌高生が町の郷土芸能「こきりこ唄」を初めて披露
03年 11月	素明女子高生が海鳥センターで環境学習
04年 9月	羽幌高生がYOSAKOIソーラン踊りを披露
07年 7月	素明女子高生が焼尻島訪問、初山別キャンプ
09年 中止	※韓国で新型インフルエンザが流行したため
12年 7月	素明女子高生が学生ボランティアと交流、天売島訪問
13年 中止	※朝鮮半島の政情不安のため
12月	高門宮記念日韓交流基金の名誉総裁賞を受賞
14年 9月	羽幌高生が3年ぶり訪問。文化祭や遠足などの学校行事に参加
15年 中止	※韓国で中東呼吸器症候群(MERS)感染者
16年 7月	素明女子高生が4年ぶり訪問。学生ボランティアと焼き肉や花火
17年 中止	※北朝鮮の核実験や弾道ミサイル発射のため
18年 8月	交流20年目、羽幌高生が「神楽舞」を披露

確かな絆 日韓交流20年

羽幌高と素明女子高



仁川空港で記念撮影する生徒や引率者ら

相互訪問計178人参加

「政治に左右されたくない」

【羽幌】韓国・ソウル近郊にある富川市の素明女子高との相互訪問交流で、現地を訪れた羽幌高の生徒たちが3日、6泊7日の日程を終えて帰国する。民間主導の「草の根」の国際交流は今年で20年の節目。過去には朝鮮半島情勢などで訪問の中止を余儀なくされたこともあったが「国同士の都合に左右されたくない」という関係者の強い思いが交流を支える。

（羽幌支局 長谷川 賢）

「初めて隣の国に行き、エネルギーを感じた。とても刺激になった」。2000年、羽幌側からの最初の訪問に参加した町内の通訳ボランティア(36)は振り返る。いま漁師をしながら美容室を経営。自身の進路を決める時、韓国での経験が力になった。「交流をせひ続けてほしい」。

交流は1999年に始まった。羽幌国際交流協会の設立記念事業として発案され、羽幌高創立50周年記念事業にもなり実現。同年に素明から生徒ら10人が羽幌へ、翌年は羽幌から生徒ら11人が韓国側に招かれ、以降、ほぼ毎年の相互訪問が続いた。これまで双方各8回、同国で延べ178人が参加した。

今回の羽幌からの訪問は15、17年の交流中止の影響で4年ぶり。生徒の関心は高く5月の事前説明会には16人が出席。同協会の南田孝子代表(68)は「こんなに集まったのは初めて」。最終的に生徒8

人、引率者6人の過去最多が参加した。

生徒たちは現地でホームステイしながら、素明女子高の授業に出席したり、羽幌の郷土芸能を披露したり、さまざまな形で交流。「センイル・チュッカハニダー」(ハッピー・バースデー)。「出発当日の8月28日午後には3年の佐藤未結さん(17)がホームステイ先の父親の54歳の誕生日をホストファミリーと一緒にケーキを囲って祝った。みんな笑顔があふれた。

取り組みは2013年、単の根の友好親善として評価され、高門宮記念日韓交流基金の名誉総裁賞を受賞。同協会の小川雅人事務局長(72)は「政治に左右されたくない」という思いで続けています」と話す。

韓国側も息の長い交流を望み、素明女子高の手塚郁枝校長(61)は「交流が未来にもっと大きな一歩になることを願います」と話した。

ただ課題もある。その一つが担い手育成だ。協会員は60〜70代が中心だが、過去に相互交流で韓国を訪問した卒業生は現在20〜30代。南田代表は「その子たちがバトンを受け取ってくれば」と期待する。

今回、20代の会員2人が引率者で参加。その一人の町職員渡辺将平さん(24)は言った。「人と人の結びつきの強さを感じた。国際交流の発展に貢献したい」。

